

特別活動

(学級活動)



I はじめに

「今正に我が国に求められているもの、それは、『自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び』である。」これは、平成25年6月に閣議決定された第2期教育振興基本計画の前文に記された文言である。社会における諸問題が複雑に絡み合って生じた“我が国の危機的状況”を打開すべく、『自立』『協働』『創造』の3つの理念が具体的に示された。これらは特別活動の目標と合致する点が多く、関連が深い。ゆえに特別活動で培った態度や能力は、将来にわたって活かされるものとなることが想定される。そのことから、集団活動や体験的な活動を通して、自らの思考・判断をもとに自他に働きかけたり、自分自身を客観的に捉え、自己の成長に向かうことができる生徒を育みたい。

II 本校研究と特別活動との関わり

1 生徒自らが「問い」を生む手だて

学校生活や社会における「問題」に焦点をあて、「問い」を生む

学級は生徒にとって学びを進める場としてあるとともに、学校生活をよりよく送る上での基礎的な生活の場でもある。よって学級活動において学級の在り方を考えることは、学級や学校での諸問題や、生徒個々が直面している課題に対して、自主的に解決していく活動とともに、仲間と共生しながら自己実現を図っていくことにつながる。そこで、学級活動においては学級や学校づくりに参画し、生活の中における諸問題を解決していこうとする実践的な態度を育てていくことが必要である。また、これらの活動を通して、集団や社会の一員としての在り方を考え、現在のみならず、将来の生き方を考え行動していく態度や能力の育みにも期待がもてる。ここでいう「問題」とは、生徒自らが解決したいと願うものに加え、これまでの生活経験では疑問としなかったことに着目したり、矛盾が生じる内容に触れたりするなどして、日常生活や社会生活を営むために解決すべき内容として扱うものである。

前次研究まで、学級活動(1)については、生徒会活動や学校行事と関連づけ、集団が一体となって取り組みを進めてきたところである。しかしながら、学級活動(2)(3)については、個人としての生き方を選択し、行動していく自主的・実践的な活動であることから、話し合い活動が一方向の意見にとどまり、思考の深まりが見られないことがあった。

また、求める生徒の姿を「学びの主体者」とし、その育成を目指す今次研究において、学級活動(2)(3)で、集団における充実した話し合い活動を積み重ねる経験が、求める姿に迫ると考えたからである。個々の生徒は「問題」を目の前にし、話し合い活動を通して強い意思を携えた自己決定に向かうことになる。

さて、学校生活や社会における「問題」から、生徒自らが「問い」を生むには、生徒自身が問題の発

見をしたり、問題を自分（自分たち）のこととして捉えたりすることが必要となる。学級活動(1)「学級や学校の生活づくり」や生徒会活動などでは、本時に関連する事前アンケートを行うことなどを通して、生徒が問題を客観視することができる。これにより、教師が生徒の実態を把握できることも大きい。また、学級活動(2)「適応と成長及び健康安全」や学級活動(3)「学業と進路」では、議題の選択が鍵となる。生徒が自分（自分たち）の問題として捉えている議題を選ぶよう配慮する必要がある。

2 「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

「問う」たことと「問い」が解決されたこととのつながりについて意識できるようにすること

〈過去を振り返る視点〉



小グループでの話し合い活動の様子

「問う」たことと「問い」が解決されたこととのつながりを実感できるのは、本時の中で課題が解決された要因が、他者と一往復半以上のやりとりであったことを認識したときである。自らが「問う」て、それに対して相手が応えたことに対してさらに返すことにより、自身の考えが変化したり深化したりする姿が期待される。

このようなやりとりを見いだすために前提条件となるのが〈話し合い活動〉である。例えば、学級活動(1)「学級や学校の生活づくり」や生徒会活動などでは、よりよい生活を築くために集団としての意

見をまとめたり、生徒たちで適切なきまりをつくったりする場面で欠かすことができない。また、学級活動(2)「適応と成長及び健康安全」や学級活動(3)「学業と進路」では、個人として問題の解決に向けた目標や方法・内容などを生徒自身で決定するが、その過程において他者から多様な意見を聞き、判断材料を得るために、話し合い活動を行うことが不可欠となる。そして、話し合い活動で最大の要となるのは、“自己決定する”“集団決定する”ことである。これがあってこそ、自身の「問う」たことと「問い」が解決されたこととのつながりが実感できる。

なお、話し合い活動については、生徒の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるような教師の適切な指導も欠かすことができない。

「問う」ことによって「問い」が解決されたことと次の学びや未来の自分とのつながりについて意識できるようにすること

〈未来を展望する視点〉

学んだことと、次の学びや未来の自分との関わりが意識されるのは、次の学びへの展望を具体的に描き、実践に向かうときである。そのため、事後の学びを大切にしたい。

まずは、本時の終末に話し合い活動を通して決定したことを確認する。その上で、学級活動(1)「学級や学校の生活づくり」や生徒会活動などでは、“集団決定した”ことをもとに、役割分担して全員で協力して実践したり、活動の過程や成果について目標をもとに振り返ったりすることが想定される。また、学級活動(2)「適応と成長及び健康安全」や学級活動(3)「学業と進路」では、“自己決定した”ことをもとに、責任をもって実践したり、実践の過程と成果について目標をもとに振り返ったりすることが想定される。これらのことにより、「問う」ことによって「問い」が解決されたことが、次の学びに活きたり、他の場面においても転用されたりするので、学びを実感することとなる。

なお、事後の学びを重視するためには、生徒が意味づけの内容を振り返ることを通して、検証したり、実践をしている。具体的には、学びのシラバスやワークシートによる振り返りや、今後の見通しをもつことで可能となる。

Ⅲ 実践例

1 第1学年の実践

学級活動の内容	本授業の目標
(2)適応と成長及び健康安全 イ 自己及び他者の個性の理解と尊重	自分の考える「自分らしさ」と他者の自分への見方のずれに気づき、他者のよさを見付け、認めることができる。また、他者から見た「あなたのよさ」を、自分のよさとして受け止めることができる。
生徒自らが「問い」を生む手だて	「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて
自分の考える「自分らしさ」と客観的に見た「自分らしさ」のずれに気付いたとき、これまで生徒自身が疑問としなかった他者から見た自分の姿に着目することで、「問い」を生む。	カードを渡し合い、それを基にした話し合い活動より他者から認められる経験から、自分自身に自信をもち、これからの学校生活をどのように過ごしていくか「自己決定」を促すことで自分の考えを広げることにつながる。〈未来を展望する視点〉
題材設定の理由	
1年生のこの時期は中学校生活2か月が過ぎ、旅行的行事を終え、互いのことを理解しはじめる時期である。一方で自分自身を上手く表現できない生徒や自分に自信をもてずにいる生徒がいる。そこで、客観視された自分の姿を知ること、自分に自信をもったり、これからの活動に積極的に取り組んだりすることにつながるよう本題材を設定した。	

(1) 授業の流れ

① 自分自身を振り返り、自分がどんな人なのか考える。

自分がどんな人なのかを考えて、MY CARDに記入する。

② 隣同士でMY CARDの内容を当て合い、内容を確認し合う。

MY CARDの内容とYOUR CARDの内容が一致するか、しないかをお互いに確認する。

③ 結果の交流から他の人のMY CARDの内容をあてることや他の人にあててもらえるかどうかを考えることで「問い」を生む。

他者のMY CARDの内容をあてることができるか、逆にMY CARDの内容を当ててもらえるかを考えることから、他者から見た自分らしさと自分から見た自分らしさの2つがあることに気づき、「問い」が生まれる。

④ 学習課題の共有化

【学習課題】

自分から見た『自分』と周りの人から見た『自分』は一致するだろうか

隣同士の活動から、「自分から見た『自分』と周りの人から見た『自分』が一致するのか」という課題を共有する。班員分のYOUR CARDを作成し、班内交流を行うことで、MY CARDの内容とYOUR CARDの内容が一致するかを考え、感想を交流する。

⑤ 別の班員のYOUR CARDを作成し、互いに渡し合う。

別の班員が自分のことを見て書いたYOUR CARDを受け取る。YOUR CARDを通して自分を客観視する。また、MY CARDとYOUR CARDを1枚の台紙に整理して貼る。記述内容を見ながら、自分に対する他者の考えと自分の考えの相違や一致から自分に対する見方や考え方を深め、広げていく。

⑥ 活動を振り返る。

「台紙を見て感じたこと」をもとに、「今後に生かしていきたいこと」をワークシートに記述し、交流し、どのように生活に活かしていくかを「自己決定」する。

(2) 研究との関わりについて

①生徒自らが「問い」を生む手だて

本時は、自分が考える自分らしさと他者が考える（客観視した）自分らしさの違いに気づき、「他者から見た自分はどのようなのだろうか」という「問い」を生むこととした。

MY CARDには自分自身がどのような人間か、YOUR CARDには隣の人はどのような人間かを書くよう指示した。お互いにカードを交換しその内容が一致するかを確認した。当たる生徒もいるが、中には当たらない生徒もいる。同様に、他の人がどんな人なのか（MY CARDの内容）を当てることができるか、自分がどんな人なのかを当ててもらえるかを考えることに

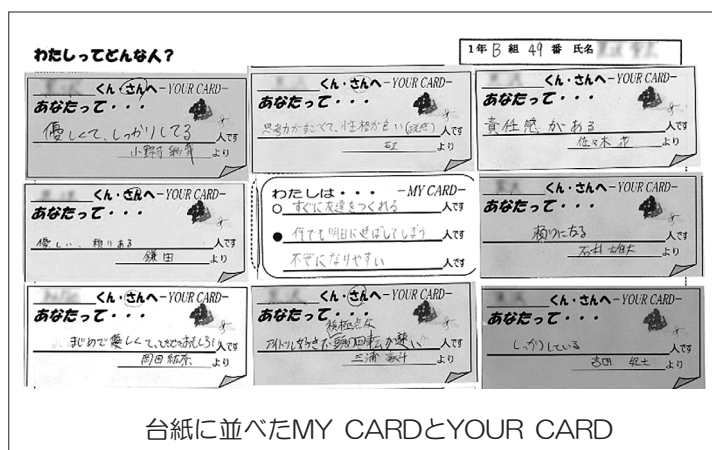


CARDを読み、「問い」が生まれる

より、仲間が自分のことをどう思っているかに関心を抱く。それにより、普段はあまり意識しなかった「周りには自分がどのように映っているのか」という「問い」が生まれた。

②「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

生徒たちが授業の中で自分が考える自分らしさ（MY CARD）と他者が考える自分らしさ（YOUR CARD）を比較し、話し合う活動を設定した。この話し合い活動は以下のような手順で行った。①班内でYOUR CARDを受け取る。②受け取ったYOUR CARDをもとに他者の考えに触れる。③隣の班の人からもYOUR CARDを受け取り、台紙に全てのカードを並べて感じたことを話し合う。自分以外の考えに触れ、他者との話し合いが自分のよさとはなんだろうという自らの「問い」を解決する手だてとなった。そこから「自分から積極的に取り組むようにしていきたい。」「仲間のよい所も積極的に探していきたい。」というような、この授業後の自分の行動の自己決定につなげることができた。



台紙に並べたMY CARDとYOUR CARD

2 第2学年の実践

学級活動の内容	本授業の目標
(1)学級や学校の生活作り ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決	学級の一員として、学級の問題と真摯に向き合い、学級での生活をよりよいものにしていこうとし、さらに自分の学級の充実や向上のために必要なことは何かを考え、それを実践する態度を育む。
生徒自らが「問い」を生む手だて	「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて
あらかじめ学級の問題についてのアンケートをとり、それを基に議題を設定する。自分の学級の問題に対する解決策が「問い」となる。	自分の学級の問題を話し合い活動によって解決策を考え、自分の学級の充実や向上のためにどうするか、集団決定する場面を設定する。〈過去を振り返る視点〉

題材設定の理由

第2学年は学年集団の一員として、よりよい学校生活を送ることができる学年集団を築こうとする態度の育成のために、学級活動(学級会)を学年経営、学級経営の軸に置いている。本時は学級会で決めた学級目標と照らし合わせた学級の諸問題を解決する時間とする。新たな仲間と出会った緊張感も、旅行的行事を経て、よい意味で緩和されてきたこの時期に、自分たちの学級の問題を自分たちの手で改善しようとする態度を育成する。

(1) 授業の流れ

① アンケートの結果を発表し、本時の議題を決める。

学級の生徒全員を対象に「自分の学級をよりよくするために」というタイトルで、自分の学級の問題点を見つめ直す記述式のアンケートをとった。その結果を票数とともに発表し、学級全体で現状を把握する。アンケートの中で「仲間に対する話の聞き方が悪い」、「発表者に偏りがある」と書いた生徒にその想いを聞く。教師が補足しながら、議題を決める。

本日の議題：仲間に対する話の聞き方が悪い

② 本日の課題解決に切実感をもたせ、議題の共有化を促すための交流を行う。

アンケートに「話の聞き方が悪い」と書いていない生徒や、書いていたとしても切実感をもたずに書いている生徒については、課題を解決するための切実感をもつ必要がある。話を聞いていないという現状や実際に話を聞いてもらえていない体験など、仲間から想いを聞くことにより、この議題を解決しなければならないが、どうしたらよいのかという「問い」が生まれる。また、このことにより、議題(学習課題)を共有化することができた。

【学習課題】

学級の授業をレベルアップするために、「話の聞き方」はどうしたらよいだろうか

③ 教科係ごとにグループをつくり、議題について話し合い活動を行う。

議題は特に授業のことであることから、各教科を担当している教科係(3名)ごとに小グループになり、議題について話し合い活動を行った。教科としての視点で「話の聞き方」を改善する方策を練ることとした。

④ 各教科係で考えた方策を画用紙に書き、学級全員で共有する。

各教科係にあらかじめ配付しておいた横長の画用紙にそれぞれが考えたことを記述させた。それを黒板に並べたことにより、学級で出た議題に対する意見を俯瞰することができた。そこから学級の“掟”を考えることとした。ここでの話し合いはあくまで収束に向かうように促し、それにより6つの掟ができた。考えた“掟”は学級の見やすいところに掲示することにより、決めただけで満足しないようにした。



(2) 研究との関わりについて

① 生徒自らが「問い」を生む手だて

話し合い活動において、その議題は非常に重要である。学級全体がそのことを自分の学級の問題と認識し、解決したいという切実感が必要である。そこであらかじめ学級の問題についてのアンケートをとり、それを基に議題を設定した。教師から与えられたものではなく、自分の学級の、自分たちが感じる問題に対する解決策が「問い」となった。「仲間に対する話の聞き方が悪い」という問題は、これだけでは学習課題につながり、「問う」とつながりの強い「問い」にはなりづらい。そこで、「話の聞き方が悪い」と思うに至った経緯、学級の実情、話を聞けなかった経験、逆に話を聞いてもらえなかった経験を、学級で交流することで、解決しなければならないという想いを強くもたせることができた。

②「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

議題を決めるに当たり、議論が焦点化するように、学校生活で聞き方が悪い場面に授業時間に限定した。これは、「問う」活動をする際、同じ視点で話し合うことによって議論が活性化する一因となった。また、小集団での話し合い活動では各教科係でグループをつくり、自分の担当の教科について、「話の聞き方」について話し合うこととした。これは教科係が各教科の実情をよく知っていること、また



各教科係なので、お互いに責任をもってこの問題を解決するための話し合いができるという面で有効であった。各教科係で考えた“掟”は画用紙に記述し、黒板に貼った。1つの係で2～3つ考えたので、全部で30くらいになった。切実感をもって学級の問題について一人一人が考えた30くらいの掟を、絞り込んでいくと、せっかく出した意見が淘汰される感覚をもつ生徒が少なからずいる。そこでグループピンギヤカテゴリー分けして、6つほどに集約し学級の掟として集団決定することができた。

3 第3学年の実践

学級活動の内容	本授業の目標
(3)学業と進路 ウ 進路適正の吟味と進路情報の活用	将来の生き方や進路との関係で自分を知るとともに、人の生き方や進路に関する興味や関心を広げる。
生徒自らが「問い」を生む手だて	「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて
生徒は進路選択を迫られる現実に直面しつつも、自分の資質や能力を認識出来なかったり、社会に対す視野が狭かったりといった課題を抱え、自信をもって自己決定に向かえずにいる。そうした問題に焦点をあて、「問い」を生む。	他者の視点を踏まえて適性のある職業を考える授業展開とワークシートの工夫。 <過去を振り返る視点> 「問う」ことによって気づいた自分の資質や能力を踏まえて、進路を考える上で大切にすることを自己決定する場の設定。 <未来を展望する視点>

題材設定の理由

4月に行った進路意識調査の結果、半数以上の生徒は将来なりたいと思う職業を決めていないことが分かった。もちろん、なりたい職業が全くないというわけではないが、希望の職業を口にするほど自分に自信がもてない生徒が少なからずいるのではないかと感じた。そこで、クラスメイトの力を借りて、自分の資質や能力を確かめたり、それを生かす職業を考えたりすることで、自信をもって進路を選択できるように本題材を設定した。

(1) 授業の流れ

①事前に実施した進路意識調査の結果を示す。

なりたいと思う職業がある人の数を数字で示し、その意味を考えさせた。その後、数字の意味を伝えようと、意外と多いと感じる生徒もいれば、逆に少ないと感じる生徒もいたが、一様に興味を示していた。

②なりたい職業を決めた理由と決められない理由を発表する。

なりたい職業を決めた理由としては、小さい頃からあこがれているといった漠然としてものが多かった。決められない理由としては、職業について具体的に知らないといった社会に目を向けたものや、自分にできることが分からないといった自分に目を向けたものがあげられた。

③第2回子ども生活実態基本調査（2009年ベネッセ教育総合研究所調べ）の結果を示す。

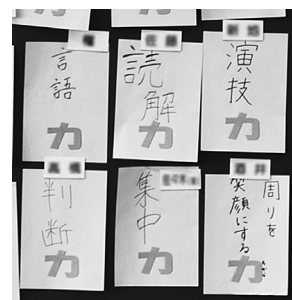
「なりたい職業がある」と回答する割合が、年齢とともに下がっていることや、中学校3年生の割合が半数程度で、学級の実態と一致していることを確認した。その後、なりたい職業を見つけるため

には、どのようなことを考えたらよいのかを尋ねると、「職業について知る」、「自分の興味関心、能力を考える」といった意見が出された。

【学習課題】 自分を生かせる職業とはどのようなものなのだろうか

④自分のもっている資質や能力を「〇〇力」という形で書き出す。(ワークシート)

取り組み始めるとともに、「わからない」といった声があちこちからあがった。自分に自信がもてないことの証拠であろう。そこで、自分にはなかったとしても将来生かせそうな「〇〇力」を一人一つ紙に書いて黒板に掲示し、そこから選ぶ形にした。



⑤4人グループで自分のもっている資質や能力を交流する。

本人が書いた資質や能力の部分が隠れるようにワークシートを折り、次の人に書いてもらい、書いた部分が見えないように折り直し次の人に回す形式で行った。他者の意見に惑わされず、それぞれが感じたその人の資質や能力を書くことで、より多角的に考えを交流できた。

⑥ワークシートに書かれた自分の資質や能力を参考に、気になる職業に必要な力を考え、交流する。

クラスメイトが書いた自分の資質や能力に驚きつつも楽しそうに職業について考える姿が見られた。お互いに向いていそうな職業を勧め合うことで、職業についての視野が広がった。また、もともと希望する職業があった生徒は、自分にまだ足りていない力を見付けることができた。

⑦進路を考える上で自分が大切にすることを記入する。

多くの生徒が、自分の新たな一面を発見したり、自分の適性にあった職業を考えたりして、進路についてこれからも考え続けていこうとする意欲をもつことができた。また、他者の意見が大いに参考になり、自らを客観的にみることの重要性に気付くことができた。

(2) 研究との関わりについて

①生徒自らが「問い」を生む手だて

上記に示した第2回子ども生活実態基本調査からもわかるように、現代は自らの将来像を描きづらい時代になっている。また、情報は溢れているものの、彼我を比較し自信がもてなくなったり、社会の変化が大きく将来どんな職業があるのかが見えにくかったりすることで、進路に対しても漠然として不安を感じつつも、何をすべきかわからないという問題を、多くの生徒が抱えている。その問題を学級全体で共有することで、悩んでいるのは自分だけではないという安心感のもと、自分を生かせる職業とはどのようなものなのかという「問い」が生まれると考えた。授業では、希望の職業が決められない生徒から、職業に対しての知識が不足していることや自分の能力に対する不安などの悩みが出され、「自分を生かせる職業とはどのようなものなのだろうか」という学習課題の設定につなげることができた。

②「問う」ことの価値の実感をもたらす手だて

自らの資質や能力に対する他者の言葉を踏まえて、進路を考えるうえで大切にすべきことを自己決定することで、「問う」ことの価値の実感ができると考えた。授業ではグループのメンバーが記入したワークシートが戻ってきた時に、その理由を積極的に「問う」姿が見られた。その後の、適性があると思われる職業を考える際にも多くの意見が交わされ、今まで考えたこともなかった職業について記述する生徒もいた。



IV 今次研究を振り返って

今次研究の3年間は実践の積み重ねが研究によって進めた3年間といえる。本校が求める生徒の姿とした「学びの主体者」となる生徒は、他者に働きかけ、他者との関わりから成長を期待するものである。特に学級活動(2)(3)は、個人としての生き方を他者との関わりから決定していくことから、話し合い活動の充実が求められた。

他者との有機的な関わりを生むために、第1学年の実践ではカードを、第3学年の実践では個々がもっているであろう資質や能力を「〇〇力」として、お互いのやり取りを行った。自分を客観的に捉えたことを、相手が応えたことが評価や判断基準となり、自分を見つめ直すことができた。さらに相手が応えてくれたことに対してさらに返すことは、自分自身の考えの変化や深化、多角的に考えることにつながり、第1学年では自分自身のよさに気づき、第3学年では、自分自身の職業観を広げることができていた。この2つの実践で顕著だったのは、生徒それぞれの自己有用感が高めるうえで、他者からの自分の客観的な評価が有効であることである。この自己有用感が学級での居場所をつくり、進路選択でも必要なものである。

長所をたくさん言ってもらえたので、その期待をうらぎらないように(今の長所を続けていけるように)したいです。また、今回でまだあまりみんなの事を知らなかったということが分かったので、みんなに積極的に話しかけていきたいです。

【第1学年の振り返り】
自分のよさに自信をもち、他者との関わりに価値を感じていることがわかる。

自分の持っている力を、大きく生かせるような仕事、ということを常に考えたいと思います。今までも、自分にあったこととは何だろうと考えるから進路についても考えてきましたが、他人の視点で評価してもらうことで、道が広がったので、客観的に自分を表現してもらうためにも、他人の意見もきいていきたいと思いました。



【第3学年の振り返り】
他者の視点から自分を客観視でき、職業観を広げることができている。

第2学年の実践である学級活動(1)では、学習課題が与えられるものではなく、学級をよりよくしようとする強い願いがあり、学級の生徒それぞれが切実感をもった学習課題であったことがよかった。また、座席が近い人と話すのではなく、教科係という議題に沿った小集団での話し合い活動を行ったのは、話し合い活動を活性化するのに有効であった。切実感があったおかげで、学級全員で考えた“掟”をつくる活動は、話し合い活動の様子や“掟”の内容をみても効果があったといえる。

発表者を優先すべし
技術

話し合いが多い。一人一人が意見を述べ、他人の意見に反応する。 (社会)

相手の説明と自分の考えの共通点と相違点を探しながら聞く、べし。 (数学科)

自分の事を優先しない! (美術)

理科
全反射しないべし

集団決定された聞き方の“掟”

今次研究の学級活動の実践で、学校生活の諸問題から自分たちの課題を見だし、その解決としての自己決定や集団決定のために、共に考えることや話し合うこと、協力すること、つまり「問う」ことが必要であることを実感し、自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育むことができた。本校が今次研究で求めた「学びの主体者」となる生徒は、まさにこのような生徒である。これからも実践研究を重ね、生徒にとってよりよい学級づくりに機能する学級活動を模索していきたい。

V 参考文献

- ・日本特別活動学会監修『キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社、2010年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説－特別活動編－』2008年
- ・文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター『学級・学校文化を創る 特別活動 中学校編』(リーフレット) 2014年